

# 研 究 論 文



# 「文章表現法」実践報告 II<sup>1</sup>

澤 亮治

## 1. はじめに

本報告は、会津大学教養基礎科目「文章表現法」2003年度～2014年度の実施内容を記録した文書である。文章表現法は、1年生後期を標準配当年次とする演習形式の選択科目（1単位）である。会津大生が日本語のレポートを論理的に書けるようになることを目的としている。後藤(2014)に述べられているように、文化研究センターは開学後のかなり早い段階から、学生の文章能力を引き上げることの必要性を認識していた。その後、1999年度の公開講座や2002年度の学内勉強会などにおいて学内の教員や市民の方々との意見交換を行い、2003年度より文章表現法が開講される運びとなった<sup>2</sup>。

授業の記録を残そうという思いに至った理由は主に二つある。文章表現法を10年以上の間牽引されてきた後藤康二先生が残念ながら2014年11月に亡くなられた。2014年度12月より、私が文章表現法の主担当を引き継ぐこととなった。その後に、先生が2013年度までの文章表現法の基礎力調査のまとめをされていたことが分かった。このまとめを引き継ぐというのが、理由の一つ目であり、また最大の理由である。とりまとめた基礎力調査をどのような形で報告するつもりであったかを後藤先生から伺うことは出来なかったが、何らかの報告を考えておられたはずである。そこで、基礎力調査に加えて、授業形式なども含めた後藤先生担当時の文章表現法の授業記録として報告することとした。

二つ目の理由は、2015年度に文章表現法の授業シラバスに大幅な変更を加えたことである。センター内外の教員の方々との意見交換を通して、今の学生に論理的な文章を書かせるためには文章表現能力を鍛えるだけでは不足であるということがセンターの共通認識となった。そのため、2015年度より、授業は「論理的に考える」とは何かを教えることから始めることとした。今後も文章表現法は必要に応じて少しずつ変化していくであろうが、変化の方向を決めるのはそれまでに積み重ねた授業の経験や実感などである。2003年度～2014年度の内容を記録として残しておくことは、今後の文章表現法に示唆を与える文書および当時の学生の能力を測る資料として意味があるものと思う。

文章表現法の実施内容に関しては、後藤先生が2006年度の文化研究センター年報に「『文章表現法』実践報告 I」（以下では後藤(2007)と表記）として、履修生に実施した基礎力調査の結果をまとめられた。この報告では、後藤(2007)実践報告 I の続編として、文章表現法の授業形式、履修学生数の推移、基礎力調査、授業評価、シラバス、各担当者の授業スタイル、授業進行の詳細を報告する。

## 2. 授業形式

2003年度～2014年度の授業形式は以下のとおりである。まず、初回の授業に履修学生全員を対象に文章力の基礎力調査を行っている。その後、担当する学生を各担当者に割り振る。年ごとに変動はあった

---

<sup>1</sup> 基礎力調査のデータ作成には、大野香織さんに尽力いただいた。授業評価など学務関係の資料収集は会津大学学生課教務係の方々より提供をいただいた。また、文章表現法の担当者の方々からは授業記録に関する資料を提供いただいた。ご協力いただいた皆様に深い感謝の意を表したい。

<sup>2</sup> 2003年度時においても授業準備がすべて整ったという段階には至っていないが、当時の学生部長のぜひ開講してほしいとの強い要望により開講することとなった。この経緯は、文セ(2008)や後藤(2014)などを参照いただきたい。

おおよそ6～8名ほどの担当教員がおり、担当する数が均等となるように学生が割り振られる。二回目の授業から最後まで、各担当者が担当学生に対して授業を行う。学生が論理的な文章を書けるようになるという目標に合致している限りは、細かく進捗がチェックされるということではなく、各担当者に進行が任される。学生の成績評価も担当者に一任される。

二回目からは各担当者に任せてしまう点などは、後藤先生らしい鷹揚なスタイルであったと思う。ただ、今思い返してみると、文章表現を教えた経験が異なる担当者に同じ授業を担当してもらうという制約の中で工夫されたやり方であったと思う。細かい指示を与えるよりもお任せしてしまった方が、経験のある担当者は経験を最大限に活かした進行が可能となり、結果として学生の力もより伸びるであろう。指示を与えて制約を作ってしまうよりも、知識・経験を十分に発揮できるやり方を選んだのではないかと思う。一方で、経験の浅い担当者は進行に関する指示があった方が心強いことが多い。この点は、学期開始前の全体ミーティングおよび後藤先生が適宜相談にのることで、進行の手助けをされていた。

私も2012年度に初めて担当者になった際に、いろいろとアドバイスを頂いた。文章表現法は少人数制のクラスであるため担当学生は毎年6～8名程度だが、講義が進むごとに徐々に欠席する学生が増えてクラスが寂しくなってしまうこともある。2012年の初担当時は7名の学生を担当していたが、六回目の講義あたりで出席者が2名となってしまった。そこで、後藤先生にどうすればよいかを相談した。その時に、角山学長(当時)の話をしていただいた。角山学長もかつて文章表現法の担当者をされていたことがあり、その時には出席学生がゼロになったことがあったそうである。2名ならば大変立派であるとのことであった。私も、なるほど角山学長でも学生数がゼロになることがあるならば、私ではマイナスになってもおかしくない。2名とは立派であると思った。いま考えてみると、解決策が提示されたわけではなかったのであるが、後藤先生の言葉で大いに励まされた。

授業のどの部分を担当者間で統一し、どの部分を担当者に任せるのかという線引きは難しい。最善な方法は担当者の好みや経験に依存するため、どの担当者にとっても最善となるような線引きは存在しないであろう。文章表現法を1993年に開講した時は、前もって公開セミナーや教員間の勉強会などが開かれており、その感触を基にして担当者一人の方法をとられたのであろうと推測する。2015年度からは、担当者となる協力をより多くの教員に呼びかけることとした。そのため、授業の共通テキストを有志で作成するなど担当者間で統一する部分の割合を増やし、初めて担当される方の不安を減らすことにウェイトを置いた線引きとしている。

### 3. 履修学生数の推移

文章表現法の受講生の年度別の推移を以下の表に示す。履修登録を行っても一度も授業に出席をしない学生もいることから、より実際の履修学生数に近い初回授業の基礎力調査の受験者数を掲載する。

表1 文章表現法の履修学生数の推移

年度	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	合計
履修数	23	136	87	155	166	67	83	76	67	47	50	43	1000

基礎力調査の受験者数を履修者数とみなすと、履修学生数は12年間で合計1000人であった。各年度で平均83名の受講生がいたことになる。このように多くの受講生を集めていたことと、5節で紹介する授業評価でも高い評価を得られていたことを考えると、文章表現の能力が伸びることを受講生がある程度実

感できる授業となっていたのであろうと感じる。

しかし、ここ数年の受講生は減少傾向であった。10年ほど前は150名を超える受講生がいたこともあったが、12年度以降は50名弱の受講生となっている。文章表現法は人文・社会の科目であるが、これは卒業に必要な人文・社会の8単位としては役に立たない。人文・社会の他の選択科目は全て2単位であるため、文章表現法(1単位)の履修にかかわらず、他に4つの人文・社会科目の履修が必要となるためである。つまり、単位という点では、学生にとっては卒業単位に加算されない自由科目と同様になる。このことが、学生の履修を遠ざける一つの要因となっているのではないだろうか。

ただ、減少傾向の理由はそれだけでは説明できない。卒業必要単位の件は開講の頃より変わっていないため、開講時から履修学生数が少ないのであれば分かるが、最近になっての減少傾向の説明には追加要因があるはずである。一つ要因として考えられるのは、学生の科目取得に対する姿勢の変化である。卒業必要単位に加算されない科目は履修しないという「効率的な」考えを持つ学生が徐々に増えているのではないだろうか。実際に、必要単位に加算されない自由科目でも同様の減少傾向が見られる。例えば、会津大学の特色である課外プロジェクト(SCCP)も、履修学生数は表2のように減少傾向にある<sup>3</sup>。学生の単位取得に対する姿勢を検証することは難しいため、あくまで仮説である。しかし、文章表現法・SCCPともに減少傾向にあり、学生の姿勢が何らかの形で変化したことは十分に考えられる<sup>4</sup>。

表2 SCCP(前期)の履修学生数の推移<sup>5</sup>

年度	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15
履修数	514	470	424	486	557	371	246	314	309	315	253	279	248

文章表現の技術は卒論作成に必須であり、社会に出てからも役に立つと思うため、この減少傾向は個人的には残念である。センターの教員もこの傾向を懸念しており、文章表現を含めたアカデミックスキルを育成する授業の新設に関する勉強会を2013年度より不定期で開催している。このことに関する背景および実現への課題は青木(2013)に述べられている。

#### 4. 基礎力調査

前述したように、2003年の科目開設以降、初回の授業に文章力の基礎力調査を行っている。調査は毎年同じ内容であり、誤文訂正問題と、与えられた文章の要約および感想文から成る<sup>6</sup>。まず、基礎力調査の内容を簡単に紹介する。次に、誤文訂正問題の問題文と試験結果の平均点を提示し、回答の傾向を分析する。最後に、誤文訂正問題に加え、文章の要約および感想文を含めた得点の傾向を分析する。

誤文訂正、文章要約、感想文の各大問の構成および配点を簡単に解説する。誤文訂正問題は全部で16問あり、各問で訂正が必要である可能性のある文が与えられる。訂正が必要である場合には、訂正箇所と訂正文を回答する。文章要約問題と感想文の問題では、共通した問題文を用いる。問題文は約1000字の文章で、内容はチョウチンアンコウの生態とそれに対する筆者の感想から成る。この問題文を200字以内に要約するのが文章要約問題であり、問題文に対して400字以内の感想を書くのが感想文の問題である。

<sup>3</sup> 自由科目であるSCCPは、学生が1年生から自分のペースで実習・研究に参加できる会津大学独特の科目である。多数の教員がそれぞれの研究テーマで開講しており、学生は自由に研究テーマを選択することができる。

<sup>4</sup> 他に考えられる要因として、2008年度のカリキュラム改正の影響がある。しかし、カリキュラム改正では人文・社会科目の卒業必要単位は変化しておらず、影響は小さいと思われる。

<sup>5</sup> 会津大学学生課教務係の方々のご協力により作成。

<sup>6</sup> 2015年度は基礎力調査の問題を新しいものとした。理由は本節で述べる。

配点は、誤文訂正が 38 点、文章要約が 30 点、感想文が 32 点である。

誤文訂正問題の問題文と平均点を以下の表に示す。配点は①から⑬の問題が各 2 点、⑭から⑯の問題が各 4 点である。後藤(2007)では、これらの問題に対する回答の傾向に関して報告がされている。詳しい傾向に関してはそちらに譲り、ここでは会津大生が苦手とするのはどのような種類の問題かを検討してみよう。

表 3 誤文訂正問題の問題文と平均点

	問題文 (配点: ①～⑬ 各 2 点、⑭～⑯各 4 点)	平均点
①	人類が破滅にもなりかねない。	1.2
②	聴き手に誤解を招く恐れがある。	0.4
③	私は彼の論文を読んだのはこれだけだ。	1.5
④	彼は悪人だろうか。ぼくは、そう思えない。	1.0
⑤	彼女を知って以来、彼女への愛情が、彼の詩によってよくわかる。	0.5
⑥	現代社会において、人の前で話す機会が多くなってきた。	0.3
⑦	その作品は、人間の心の表と裏が書かれている。	1.0
⑧	私の家は、駅から約十分ぐらい歩いた所にある。	0.7
⑨	この本を読んで思ったことは、何が書いてあるかわからなかった。	1.1
⑩	新しい生活に胸をふくらませる。	0.3
⑪	その学校も何年か先には湖底になる。	0.4
⑫	二十人のけが人の中には、船長が重傷で死にそうであった。	1.2
⑬	飛鳥での遺跡について面白いことを聞いた。	1.4
⑭	電柱のところを右にまがると、そこには二階建ての家のあけはなたれた二階の窓辺に少女と庭に父がいて話をしていた。	2.2
⑮	私は、貧しさが不幸に結びつくとは感じられず、その人たちが幸福と感じていれば、幸福である。	1.4
⑯	私は、生まれてから現在までの二十年余りを振り返ってみると、幸福だったと思う瞬間がいくつかあった。	0.9

平均点が低いのは②、⑥、⑩、⑪の問題であった。最も平均点が低かったのは⑩の問題である。正答となる訂正は「新しい生活への期待に胸をふくらませる。」のように「期待に」を追加する、またはこれに沿った訂正である。後藤(2007)によると、正解となった回答も含めて最も多かった回答は「訂正の必要なし」である。次に平均点が低かったのは②と⑥の問題である。これらの問題も最も多かった回答は「訂正の必要なし」である。⑪に関しては後藤(2007)では言及がないが、おそらく「訂正の必要なし」が最も多かった回答ではないかと推測する。

個人的な考えであるが、2 種類の問題に関しては正答率が悪いようである。まず一つ目は、話し言葉よりも文章でよく使われる表現に関する誤りがある問題である。例えば、⑩の問題は胸をふくらませるという表現は知っているであろうが、期待や希望に胸をふくらませるという形で使うということは、そのような表現を使う文章と何度か出会わなければ意識されないのではないだろうか。このような問題では正答率が悪いように感じる。⑪も同様に、文章に触れる機会が多く、「湖底に沈む」といった表現が使われている

文章に出会ったことがあれば、訂正が思いつくのではないだろうか。

二つ目は、主語と共に使われる助詞（「が」や「は」など）以外の助詞の使い方に誤りを含む問題である。上記の②や⑥が該当する。この原因は、理解は出来るが違和感があることを言葉で表現する力が、まだそれほど育っていないためだろうか。例えば②の問題文は「聴き手に誤解を与える」と「聴き手の誤解を招く」という二つの表現を取り混ぜて使用してしまっている。「聴き手に誤解を招く」という文には少々違和感を覚えると思うが、二つの表現とも同様の意味を持つため、伝えたいことは理解できる。②や⑥のように文の意味がある程度理解できるという場合には、あえて違和感を突き詰めず、訂正の必要なしと回答する傾向があるように思う。

一方で、①や③など主語と共に使われる助詞の使用に誤りがある問題は、比較的正答率が良いように感じる。文の主役である主語は話し言葉でも重要であり、主語を示す助詞は日常から意識して使っていると思われる。正答率を見ると、そのような助詞に対しての感覚は学生も持っているようである。

誤文訂正問題、文章要約問題、感想文の問題の平均点および合計得点の平均点を年度別に示したのが以下の表である。表の一番右側の列の数値は、全受講生（2003 から 2014 年度の受講生）の学力調査結果の平均点である。年度別に多少の得点のばらつきはあるが、おおむね一定の傾向があると言える。誤文訂正問題に関しては、15 点を中心に年度によって 2 点ほどのばらつきがみられる。要約問題は、各年度でおおよそ 20 点前後の平均点となっている。感想文問題は、開講から数年は得点のばらつきが大きいですが、2007 年度以降は約 20 点弱の平均点で安定しているようである。

表 4 3つの大問および合計点の平均得点（年度ごと）

年度	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	平均
誤文	17.8	16.1	12.7	16.5	16.3	13.8	15.2	14.5	15.0	16.2	16.6	13.0	15.4
要約	19.2	19.4	17.0	20.1	20.0	17.6	18.6	19.0	17.8	18.0	17.2	21.1	19.0
感想	27.0	24.9	11.1	10.2	18.6	18.0	19.0	17.3	19.4	16.5	19.4	19.3	17.6
合計	62.0	60.4	40.8	45.9	54.8	49.3	52.8	50.8	52.1	50.6	53.3	52.2	51.7

要約問題では、重要な内容が不足なく含まれていることと、文章が全体としてまとまっているかの二点を主に評価する。平均の 20 点であれば、重要な点が一つか二つ抜けているがほぼ網羅されており、ある程度文章もまとまっているという点数である。

感想文の問題は、文章の明確さ（自分の感想を明確に伝えているか）、文章が筋道立った展開になっているか、本文に対する感想になっているかの三点を中心に評価する。最後のポイントは当然のように思われるかもしれない。ただ、最初の二点については問題文と直接関係のない例えばスルメへの思いを文章としても、文章が明確で論理的であれば評価される<sup>7</sup>。そのような文章は最後のポイントで減点対象となる。感想文問題の 20 点弱という得点は、三つのポイントの二つがある程度満たされており、残りの一つが「もうすこし頑張りましょう」という水準にある回答が得る点数にあたる。

配点に対する得点の割合をみると、誤文訂正問題は 38 点中 15.4 点であるので配点に対して約 4 割の得点、要約問題では配点 30 点に対して約 6 割の得点、感想文では配点 32 点に対して約 5 割の得点を平均し

<sup>7</sup> 実際にどの程度の評価となるかは分からない。しかし、厳密に最初の 2 点に従って文章を見るとすると、論理的で明確な文章であればある程度の評価は得られるはずである。

て上げていることが分かる。得点からは、誤文訂正など文法の問題に弱く、文章を書く問題は比較的得意としている傾向が見られる。

しかし、担当者としては少し異なる感想を持っている。問題が比較的短い文章を書かせるものであったことが得点の高い要因の一つであり、長めの文章を書くような問題では結果が違ってくるのではないかと。短い文章では思いついたことから書き始めても文章をまとめることが容易であるが、長い文章では構成を考えて書かないとまとまりのある文章を書くことは難しくなる。実際に授業内で800字程度の文章を課題とすると、文章表現に慣れていないうちは、冒頭と文章末で明確な一貫性がない文章を書いてしまうということが起こる。長めの文章を書かせて評価をしたいという点は他の担当者の方とも共有し、2015年度の基礎力調査では問題を新しいものとし、300字以内の要約と600字以内の意見文を書かせる問題を課すこととした。

## 5. 授業評価

文章表現法を履修した学生の授業評価を下の表に示す<sup>8</sup>。学生の授業評価は2009年度より行われているが、2012-2014年度の評価結果のみ入手可能であった。表5では、この3年度分の履修学生数と各評価項目の回答の平均値をまとめている。また、参考として各年度の学内の全科目の平均点も掲載した。各項目の評点は、1が最低評価、5が最高評価であり、項目ごとに平均値を算出している。質問によって、“非常にそう思う”=5、“ある程度そう思う”=4、“あまりそう思わない”=2、“全くそう思わない”=1の4段階で評価される場合と、または、“高かった”=5、“やや高かった”=4、“適当であった”=3、“やや低かった”=2、“低かった”=1の5段階で評価される場合がある。総合評価は各年度の全評価項目の値の平均である。

総合評価の点数は全ての年度で全科目平均を上回っており、学生から高い評価が得ていたことが分かる。各項目の評価も高く、シラバスに関する項目以外は全ての項目で全科目平均より高い評価となっている。

表5 2012-2014年度の授業評価

年度	回答数	評価項目										総合評価
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
2012	17	4.29	4.59	4.35	4.47	4.06	4.53	4.24	4.18	4.59	--	4.37
全科目平均		4.13	4.16	4.25	4.11	3.98	4.01	3.66	3.97	4.06	--	4.04
2013	13	4.15	4.77	4.92	4.85	4.69	4.92	4.15	4.46	4.85	--	4.64
全科目平均		4.29	4.34	4.37	4.30	4.16	4.33	4.12	4.15	4.38	--	4.27
2014	25	4.17	4.61	4.81	4.08	4.68	4.34	4.71	4.40	4.41	4.48	4.47
全科目平均		4.28	4.32	4.25	4.08	4.13	4.22	4.16	4.10	3.99	4.15	4.17

表6 2012-2013年度評価項目

1	(授業準備) シラバスは、履修選択の参考となるように講義の目的と内容・進行予定がわかりやすく書かれていますか
2	(授業準備) 教員は、テキストの指示やハンドアウト、課題及び小テストの作成等、十分に講義の準備をしていますか

<sup>8</sup> 授業評価への回答は任意であるため、回答数は3節の履修学生数とは一致しない。

3	(教授方法) 教員は講義のねらい・目標を、あらかじめ説明していますか
4	(教授方法) 講義は聞き取りやすく、わかりやすいですか
5	(教授方法) 白板、オーバーヘッド、ビデオ等プロジェクター、その他教育のための器具、設備の使い方は効果的でしたか
6	(教授方法) 教員は質疑応答、討論を行うことに積極的でしたか
7	(教授方法) 講義時間以外に、教員は話す機会(オフィスアワー等)を設けていましたか
8	(授業内容) 講義で得られる知識・技術の難易度は高かったですか
9	(総合) 講義の内容、教員の教授方法を総合的に評価して、よい講義ですか(後輩に推奨できますか)

表7 2014年度評価項目

1	【シラバス】 シラバスは、履修選択の参考となるように講義の目的と内容・進行予定がわかりやすく書かれていた。
2	【授業準備】 教員は、テキストの指示やハンドアウト、課題及び小テストの作成等、十分に講義の準備をしていた。
3	【目的・ねらい】 教員は講義のねらい・目標を、あらかじめ明確に説明した。
4	【評価の基準】 成績の評価の基準は、あらかじめ明確に説明された。
5	【教授法】 講義は聞き取りやすく、わかりやすかった。
6	【機材】 白板、オーバーヘッド、ビデオ等プロジェクター、その他教育のための器具、設備の使い方は効果的であった。
7	【積極性】 教員は質疑応答、討論を行うことに積極的であった。
8	【コミュニケーション】 教員は口頭でもメールでも、質問や相談がしやすかった。
9	【内容】 講義で十分に、知識・技術が修得できた。
10	【総合】 講義の内容、教員の教授方法を総合的に評価して、よい講義であった。(後輩に推奨できますか)

特に文章表現法の特長が高い評価として現れている項目を三つ挙げておこう。それらは、授業準備に関する項目(2012--2014年度の評価項目2)、授業目標の周知に関する項目(2012--2014年度の評価項目3)および討論に関する項目(2012--2013年度の評価項目6、2014年度の評価項目7)である。授業準備に関しては、担当者間の意見交換を通して、また独自の工夫も加えながら、論理的な文章を書けるように各担当者が内容を作り込んでいた。そのような丁寧な作り込みが学生側にも伝わり、高く評価されたと考えられる。授業目標に関しては、進行が担当者に任されているため、基礎力調査後の初回の講義で各担当者が授業のねらいおよび今後の進行を説明する。各担当者の方が目標や内容の丁寧な説明をしていたことが、高い評価につながっていると思われる。また、文章のテーマ設定や講評に関して、多くの担当者が授業内で学生間での意見交換や討論を積極的に行っていた。この点が討論の評価に現れている。授業の進行については、各担当者の進行記録を7節にまとめている。興味のある方は参照してほしい。

2013年度と2014年度の評価項目1が全科目平均を唯一下回っている。これはシラバスに関する項目であるが、この評価には2節で述べた授業形式が影響しているであろう。担当者に最大限の力を発揮してもらうために、シラバス内では授業内容の細かい指示がされていない。この項目に関して全年度で4

点以上であり低い値ではないが、進行内容の詳細がないという点で相対的に評価が低くなったのであろう。ただし、授業進行の詳細は各担当者より基礎力調査後の1回目の授業で説明される。準備や内容の周知に関する項目である2と3が高い評価であるので、必要な情報は授業内で十分補われていたと思われる。

## 6. 授業シラバス

後藤先生の作成された2014年度のシラバスを掲載する。コンピュータ分野の言葉を使って例えると、シラバスは文章表現法の講義に求められる項目を挙げた「仕様」にあたる。2節で述べたように、求められる項目を満たすように授業を具体的にどう進行するかという「実装」部分は各担当者に一任されている。本節では使用を紹介し、次節で各担当者が行った実装を紹介する。

### 文章表現法シラバス（2014年度）

#### 授業の概要

文章表現法は日本人の学生が日本語のレポートを論理的に書くために設けられている。大学生が正確に文章を書けるのは当たり前のはずだが、実際には少なからぬ学生が書くことが苦手のようなのである。この授業は、そういう学生の補習のための授業である。

#### 授業の目的と到達目標

この授業の目的と到達点は以下の通り。

- ・ 学生がレポートや小論文などで正確な日本語で論理的な文章を書ける能力を身につけること。
- ・ そのために、学生が毎回作文を書き、これを教員や学生が添削・批評することで、文章表現の上達をはかる。

#### 授業スケジュール

初日に基礎力調査のための試験を行う。

第二回目からは、教員一人あたり15～20人程度の小クラスに分けて授業を行う。

授業は、原則として学生が作文を繰り返し書き、教員がそれを添削したり、学生同士で批評しあったりしながら進められる。

具体的には、配属された各クラス担当教員の指示に従うこと。

#### 成績評価の方法・基準

基本的には、学生が授業で書いた文章の向上の度合いによって評価が行われる。

ただし、教員によっては、期末試験や期末レポートを課す場合もある。

#### 履修上の留意点

なし

#### 履修規程上の先修条件

なし

## 7. 各担当者の授業スタイル

以下では各担当者からお聞きした授業実践のスタイルを紹介する。前節で述べたように、「仕様」であるシラバスに対して、こちらは「実装」にあたる。ここで紹介するよりも多くの方が文章表現法を担当されていたが、大学を去られた方もおり、すべての方に実践方法をお聞きすることは出来なかった。ここでは実践方法を確認でき、かつ掲載の了承を得られた方々の授業スタイルを紹介する。掲載に当たり、匿名を希望された方のお名前はXなどのアルファベット表記とした。

頂いた実践内容を取りまとめてみると、いくつかの共通項目が見つかったので紹介しておきたい。まず、複数の担当者が共通して授業内で使用している本があった。複数の担当者の方が教科書または参考図書として名前を挙げた本は以下である。

「新版論文の教室 レポートから卒論まで」戸田山和久著 NHK 出版（2012 年）

「これからレポート・卒論を書く若者のために」酒井聡樹著 共立出版（2007 年）

「日本語表現演習と発展」（旧版または改訂版）大本泉・後藤康二・千葉正昭編 明治書院（2011 年（改訂版））

授業内容に関しては、多くの担当者の方がパラグラフライティングと呼ばれる文章表現の技術を授業で教えられていた。パラグラフライティングは、パラグラフを単位として文章を組み立てる技術であり、各パラグラフでは一つのトピックについてのみ書くなど、いくつかのルールに従って書き進めるのがポイントである。パラグラフ内で筆者の主張が二転三転することがないため、内容を追いやすく、論理的な文章を書くのに適していると言われる。論理的な文章を書ける能力を身につけるといいうシラバスの目標の「実装」方法として、この技術を多くの担当者が選んだのであろう。

授業内で書いた文章の講評については、担当者による添削以外に、学生同士でお互いの文章を講評しあうという方法を採用されている方が多かった。このように学生同士がお互いの提出物に関して意見交換をしあう手法は協同学習やピアラーニングと呼ばれる授業法の一つと考えられる。ジョンソン他(2001)によると、知識や意見の交換、他の学生への講評をしなくてはならない責任感、他の学生からの講評により自分の課題の質向上が図れるなどの要因から学習効果が高まるとされている。

## 青木滋之先生担当記録（2014年度）

教科書を指定せずプリント配布

### 0回目

全体集合。後藤先生による解説と、基礎力調査

### 1回目

なぜ文章表現法のクラスに出席する必要があるのか？

—レポート、卒論、就職活動で必須

この授業の目的

—1600文字以上の小論文を書く。10分のプレゼンテーションをする。

実際に800文字で書いてみる

—「バブル経済と庶民の消費感覚」の溝口弁護士に賛成かどうか

### 2回目

800字問題の講評・解説

小論文とは—1. 明確な問い、2. 答え、3. 論証

良い論文を書くための2つの条件—良い「素材」を上手に「調理」する

素材を仕入れる—ビリヤード法によるブレインストーミング

### 3回目

上手な調理法—パラグラフライティングの導入

—1パラグラフ1メッセージの鉄則

全体の構成

—問い+答え

—論証(本体)

—結論

論証のパターン

—演繹的な論証、帰納的な論証

背理法を用いてトピックセンテンスをつなげる練習問題

### 4回目

(いきなり小論文だと敷居が高いので)パワーポイントを使ったプレゼンテーション方法

「コンピュータを使って社会に貢献する」をテーマにして10枚スライドをつくる練習問題

### 5回目～6回目

学生による10分プレゼンテーションと、他の学生からの講評、質疑応答

## 7回目

スライドを文章化する

- 1パラグラフ1メッセージの鉄則を思い出す
- ある学生の10枚スライドを例に、文章化したサンプル(お手本)を提示

## 8回目～12回目

400字→800字→1200字と宿題の分量を増やしながら、「コンピュータを使って社会に貢献する」をテーマとした小論文のペアワーク

- 毎回ペアの学生を変えながら、お互いの文章を読んでもらって講評してもらう

## 13回目

最終課題の確認

- ・1月28日(火曜日)の16:20までに
- ・メールで添付ファイルを送ること
- ・課題の条件
  - 1600文字を超えていること
  - 問い・答え・論証の3つが揃っていること
  - 1パラグラフ1メッセージの鉄則に従っていること
  - パラグラフの先頭文(トピックセンテンス)をつなげると全体の要旨になること
  - パラグラフ頭で、接続詞が効果的に使われていること
- ・単位の評価
  - 2400字を超えており、上の諸条件も概ね満たしている →優
  - 1600字を超えており、上の諸条件も概ね満たしている →良
  - 1600字を超えているが、上の諸条件をあまり満たしていない →可
  - 1600字を超えていない →不可

石橋史朗先生担当記録 (2014 年度) (次節の詳細版を澤が抜粋したもの)

文章表現法 第2回 (2014年10月14日)

【自己紹介と半年間の目標について】

【参考図書】の紹介

- (1) 「600字で書く 文章表現法」平川敬介著 大阪教育図書 (2011年)
- (2) 「新版論文の教室 レポートから卒論まで」戸田山和久著 NHK出版 (2012年)
- (3) 「これからレポート・卒論を書く若者のために」酒井聡樹著 共立出版 (2007年)
- (4) 「これから論文を書く若者のために」(大改訂増補版)酒井聡樹著 共立出版 (2006年)
- (5) 「日本語表現演習と発展」(改訂版)大本泉・後藤康二・千葉正昭編 明治書院 (2011年)
- (6) 「理科系の作文技術」木下是雄著 中公新書 (1981年)
- (7) 「日本語の作文技術」本多勝一著 朝日新聞社 (1982年)

【わかりやすい文章を書くためのキーワード】

【意見文を書く】

- ・テーマ： 英語の早期教育について思うこと (800字以内)  
英語の早期教育に関して、「賛成」または「反対」の立場を明確にして  
意見文を作成してください。

文章表現法 第3回 (2014年10月21日)

【意見文を書く】 \*グループディスカッション

- ・テーマ： 英語の早期教育について思うこと (800字以内)  
英語の早期教育に関して、「賛成」または「反対」の立場を明確にして  
意見文を作成する。

【意見文の構成】、【説明文のポイント】 講義及び文章構造についての演習

文章表現法 第4回 (2014年10月28日)

【文章の要約】 \*アウトライン作成に向けて

- 「英語の早期教育について思うこと」(約1500字)を400字以内に要約する。  
また上記文章のアウトラインを箇条書きにまとめる。

【アウトライン】 アウトラインおよび作成法その1 (RPG法)

【RPG法の演習1】

- ・テーマ： 死刑を存続させるべきか廃止すべきか → 死刑廃止に賛成の立場で書く  
死刑廃止論と死刑存続論、それぞれの論拠をあげてみる

文章表現法 第5回 (2014年11月4日)

【文章の要約とアウトライン】 前回のフォロー

- ・テーマ： 「英語の早期教育について思うこと」を400字以内に要約し、  
さらにアウトラインを作成する。

【RPG法の演習2】 前回の続き

- ・テーマ： 死刑を存続させるべきか廃止すべきか → 死刑廃止に賛成の立場で書く  
廃止論と存続論の論拠をもとに、廃止論の立場で文章を書く場合の  
「項目アウトライン」ならびに「文アウトライン」を作成する。

文章表現法 第6回 (2014年11月11日)

【アウトライン作成法その2】 ビリヤード法

【ビリヤード法の演習1】

・テーマ： 大学生の学力低下問題について

「そもそも学力とは何か」の問いに対して、「問いと答えのフィールド」を作成する。

文章表現法 第7回 (2014年11月18日)

【ビリヤード法の演習1】 前回のフォロー

・テーマ： 大学生の学力低下問題について

「そもそも学力とは何か」の問いに対して、「問いと答えのフィールド」を作成する。

【ビリヤード法の演習2】

・テーマ： 「そもそも学力とは何か」

本日の議論をもとにして、「問いと答えのフィールド」について再考する。さらに作成したフィールドをもとにして、「項目アウトライン」と「文アウトライン」を作成する。

文章表現法 第8回 (2014年12月2日)

【「学力とは何か」に関するアウトライン作成】 前回のフォロー

【パラグラフとパラグラフィティング】

【アウトラインからパラグラフ、パラグラフから文章へ】

文章表現法 第9回 (2014年12月9日)

【パラグラフィティングの演習】

・テーマ： 英語の早期教育について思うこと (800字以内)

英語の早期教育に関して、「賛成」または「反対」の立場を明確にして意見文を作成してください。

文章表現法 第10回 (2014年12月16日)

【事実と意見の識別】

【論証のテクニック】

文章表現法 第11回 (2015年1月6日)

【わかりやすい文章とは】

【文章全体としてわかりやすくする技術】

【一つ一つの文をわかりやすくする技術】

文章表現法 第12回 (2015年1月13日)

【一つ一つの文をわかりやすくする技術】 (続き)

文章表現法 第13回 (2015年1月20日)

【プレゼンテーション】

【課題】

「文章表現法」の講義で学んだ内容のうち、自分自身の「気づき」として役立った点を3つ挙げよ。またそれらを踏まえて、今後の文章作成にあたっての取り組みについて自分の考えを述べよ。

→ レポート1～2枚 プレゼンテーション5分

文章表現法 第14回 (2015年1月27日)

**【課題】**

「文章表現法」の講義で学んだ内容のうち、自分自身の「気づき」として役立った点を3つ挙げよ。  
また、それらを踏まえて、今後の文章作成にあたっての取り組みについて自分の考えを述べよ。

→ レポート1～2枚 プレゼンテーション5分

**【伝わる文章とは何か】 (まとめ)**

文章表現法 第15回 (2015年2月3日)

**【論文の書き方】**

- ・今までの講義のまとめ 目次、鉄則集、その他ポイントとなる事項
- ・演習： 実際の学術論文を見て、「文章表現」の観点から気づいた点についてまとめる  
＜出典論文＞ 2008年 情報処理学会論文誌 論文

「楽譜情報を援用した多重奏音楽音響信号の音源分離と  
調波・非調波統合モデルの制約付きパラメータ推定の同時実現」

**【伝え方のノウハウ】**

## 太田光一先生担当記録（2011年度）

テキスト：「日本語表現 演習と発展」 大本泉・後藤康二・千葉正昭編 明治書院（2007年）

テキストに沿って授業をしています。

文章表現法の昨年半年分の結果です。

この数年ほぼ同じです。

最初の30分間は漢字や日本語の練習、その後作文、添削して次週に講評、このサイクルの繰り返しです。

原稿用紙は売店で買って事前に準備しておきます。

赤ペンで添削して次週に講評します。これが一番大変。

最初のうち講評のときは匿名ですが、そのうち参加者の実名を出します。

慣れてくると学生同士で講評させます。

1回目は基礎力調査の答合わせ

2回目から6回目までは、最初の30分を

「第一章日本語の特色」掲載の漢字を学ぶ。

7回目から10回目の最初の30分は、

『第二章敬語について』の問題をやる。

学生にホワイトボードに出てこさせて答を書かせる。

2. 漢字の勉強をやった後に、

第三章（p.39）「お節料理は必要か、不要か」

原稿用紙に書く。1時間。

3. 漢字の勉強をやった後に、

前回の作文の講評。

4. 漢字の勉強をやった後に、

p.40 「晩婚は是か非か」1時間で書く。

5. 漢字の勉強をやった後に、

前回の作文の講評。

6. 漢字の勉強をやった後に、

第三章(p.42)「心の理論」1時間で書く。

7. 敬語の勉強をやった後に、  
前回の作文の講評。

8. 敬語の勉強をやった後に、  
第五章 手紙の書き方  
例年この回が一番良かったというのが学生の感想です。  
p. 57 の手紙にならって高校の先生に手紙を書く。

9. 敬語の勉強をやった後に、  
ビジネス文書、p. 87 会議の招集状を書く。

10. 敬語の勉強をやった後に、  
推薦入試の小論文の課題を書く。

11. 前回の作文の講評。

12. プレゼンテーション  
「私の趣味」  
学生同士で採点させる。

13. 期末試験課題「私が上達した所」

## 菊地則行先生担当記録（2011年度）

### 1回目

テーマ「大学進学に入試は必要か」

800字以内

学習前の文章力の把握が目標（学生自身と教師にとって）

### 2回目

パラグラフライティングの講義

前回書いた作文を全員分印刷して配布

その作文をパラグラフライティングの視点から読み直させ、不十分な点を自己確認させる。

テーマ「私は〇〇〇が△△です」（例、私はラーメンが好きです）をパラグラフライティングの視点で一パラグラフだけ作文（意見、理由、具体例で構成）させる。

口頭で発表させ、指導。

なお、私のクラスでは、作文のテーマは学生がその場で書ける程度の知識を持っているものになっている。

### 3回目

テーマ「会津大学はおすすめか」

800字以内でパラグラフライティングの視点で作文

### 4、5回目

全員分をコピーし、配布。集団で検討会

### 6回目

テーマ「私の一番好きな季節は」

800字以内でパラグラフライティングの視点で作文

第一パラグラフを充実させることを目標にする。

### 7、8、9、10回目

全員分をコピーし、配布。集団で検討会

### 11回目

テーマ「私の文章表現法の成績は□である」（例、私の文章表現法の成績はAである）

この授業で身につけたちからを自己評価させるためのテーマ。

同時に教師にとっては教育成果を確認するためのテーマ

800字以内でパラグラフライティングの視点で作文

### 12、13回目

全員分をコピーし、配布。集団で検討会

## 黒田研一先生担当記録（2011 年度）

2011.10.04

文章表現の基礎力調査（全受講生）

2011.10.11

初顔合わせ、自己紹介、教科書参考書の紹介

2011.10.18

教科書配布 1890 円

「これからレポート・卒論を書く若者のために」 酒井聡樹著 共立出版（2007 年）  
第 3 部を先にやる。

2011.10.25

教科書 第 3 部 第 3 章完了

パラグラフライティング 抜粋の練習問題解説

来週の課題 宿題よりは時間内に書くほうが良いという意見が大勢。

課題「英語教育の早期導入について」 来週までに構想をねてくること

2011.11.01

課題「英語教育の早期導入について」概要（箇条書き、グラフ等）作文

2011.11.08

先週書いてもらった構想を返却

「英語教育の早期導入は是か非か」というとトピックに対して 賛成 6 反対 4  
二つに分かれてそれぞれ最も説得力のある展開を議論。

最後にまとめた構想を提出してもらった。

2011.12.15

英語早期教育の導入について

賛成・反対の 2 班の構想を全員で討議

改めて各自構想を練り直し 構想・骨組みを各自作成

「600 字で書く文章表現法」から 3 章 2 節 「英語教育の早期導入」<sup>9</sup>  
文章の並べ替え

2011.12.22

「600 字で書く文章表現法」から 3 章 2 節 「英語教育の早期導入」

文章の構成 並べ替え >>回答配布

---

<sup>9</sup> 「600 字で書く 文章表現法」 平川敬介著 大阪教育図書（2011 年）

J J A P論文配布 読んでおくよう指示  
前回の 英語教育の早期導入について

概要全員分を配布。

概要・骨組みを元に文章にする >> 提出してもらう

2011.11.29

J J A P 論文 音楽情報処理に関するもの

1.”はじめに” パラグラフ毎のトピックセンテンスの抽出

2. 「600字で書く文章表現法」から 文章を要約する

課題2題（輸入食品、太陽系の惑星） 授業中に 提出してもらう。

3. 英語教育の早期導入について 全員の小論文を配布 添削するように宿題。

2011.12.06

受講生が書いた「英語教育の早期導入の是非について」の作文を全員で批評

2012.12.13

「論文の教室」からの練習問題<sup>10</sup>

・チャレンジャー事故 の構想>>> 概要作成 ほぼ使い切る

・学力低下について >>> ネットワークを作る

2011.12.20

前回の学力低下問題のグラフ、チャートを元に概要（目次）を作る 1時間くらい費やす。  
次回へ向けて提案をしてもらったが、 結局「大学院進学を勧める」というテーマに決定  
宿題（1ヶ月空くので）

1) 教科書を読む

2) 上記課題「大学院進学」について構想を練る。

2012.01.17

「大学院進学を勧める」ドラフトを元に文章化

提出 >> 評価

2012.01.24

返却

「この授業を受けて・・・」をテーマに作文

(授業評価を兼ねて)

---

<sup>10</sup> 「新版 論文の教室 レポートから卒論まで」 戸田山和久著 NHKブックス NHK出版（2012年）

X 先生担当記録 (2014 年度)

- ・毎週火曜日 5 限 教室 = 「(割り振られた教室番号)」, 文章は PC で作成
- ・テキスト, 資料: 授業で配布

- ・習得目標:
  - (1) 「型どおりの技術レポート」を作成する (=題材 1)
  - (2) 「立場を決めて主張する論説文」をかく (=題材 2)
  - (3) (2) の論説文をスライドにして発表する (=題材 3)

日付	題材	○内容・解説予定	●学生の実習
②10月 14日(火)	■題材 1 型どおりの 技術レポ ートを書く: <b>30点</b>	○「文章表現法」のあらましの説明 ○技術レポートのあらまし~コンピュータ理工学 実験のレポートを例に~ ・レポート目的: 抵抗の公称値とテス タ実測値の誤差を比較し報告 (教員側準備: テスタ類, 取説類, 試 料 (3~4 班分))	●抵抗の値をカラーコードから読む ●テスタで抵抗値を測定 ●誤差の評価: 誤差は十分小さいか? 小さくしなければなぜか?
③10月 21日(火)		○技術レポートの構成 ・デモ: レポートの構成 (目的→方 法→結果→考察) (教員側準備: プロジェクタ, ノート PC)	●レポートを作成 <b>・ここでは, まず, 「型どおりのレポート」 を作成することが目的。</b>
④10月 28日(火)		○技術レポートの要点 ・提出されたレポートの返却 または 先週の作成の続き	●未完の場合: レポート作成のつづき (演 習室) ●完成の場合: 答案の返却と優秀答案の 配布
⑤11月 4日(火)	■題材 2 立場を決め て主張する 論説文を書 く: <b>40点</b>	○立場が決まった論説を読む ・日経新聞「成人年齢, 18歳にすべ き?」 ・朝日新聞「義務教育に留年は必要か」 →それぞれの論者の「立場」, それを支え る「主張の材料」を読み込む	●左の論説を読む ●どう感じたか意見出し (※板書を撮影し ておく)
⑥11月 11日(火)		○立場が決まった論説の, 文章構成に着目 する ・先週読んだ内容をふりかえる (どん な内容の論争だったか) ・論説文の文章構成に着目する (アウトラインと説得材料) ・説得材料が, 自分の立場を支える, という構造を理解 ○過去の推薦入試問題をもとに, 論説テー マを皆でえらぶ (1人2つ)	●構成シートに文章構成をかいてみる  ●次回の論説テーマの設定 (※時間が余れば書き始め)
⑦11月 18日(火)		○選んだテーマに沿い, 自分の立場をきめ て論説文を作成する ・必要に応じて, 「論説文構成シート」 をつかう	●論説文を作成 (2篇) <b>・ここでは, 「構成を考え, 論述の材料を そろえて, 論証する文」をかくことが目 的</b>
⑧11月 25日(火)		○選んだテーマに沿い, 自分の立場をきめ て論説文を作成する (つづき)	●論説文を作成 (2篇)
⑨12月 2日(火)	■題材 3 論説文をプ レゼンにし, 発表する:	○題材 2 で作成した論説文のプレゼン化 の説明 ・プレゼンテーションの基本構成 (導入→問題→立場の説明→理由の説明)	●作成した 2 つの論説文うち, どちらをプ レゼンにするか決める ●導入→問題→立場の説明→理由の説明 →結論 の順にスライドを組み立てる

	30点	→結論) これを「プレゼン構成シート」にまとめる ・プレゼンテーションの例(教員) 誰にでもわかるように・反対の立場の人にも聞いてもらえるように ・どんな情報を足しているか(追加調査の必要性)	●プレゼンスライドの作成(演習室) ・スペック：1人5分発表 ・必要に応じて「プレゼン構成シート」をつかう ・必要に応じてネット等で追加調査
⑩12月9日(火)		○先週の復習説明 ・基本構成(+プレゼン構成シート) ・足した情報←どうやって調べたか ○スライド作成の作法 ・全体の構成, 文字の大きさ, 色づかい, 図形などの利用	●プレゼンスライドの作成(演習室)(つづき)
⑪12月16日(火)		○先週の復習説明	●プレゼンスライドの作成(演習室)(つづき) ●時間があれば発表練習 <b>・ここでは、「レポートとしてまとめたことを、スライドにして口頭発表する」「そのためのわかりやすいスライドを作成する」ことが目的</b>
⑫1月6日(火)		○「文章表現法」のふりかえり ※ちょっと早いけど正月休み明けなので ○来週の発表会の前ふり	●来週の発表会のためちょっと発表練習
⑬1月13日(火)		○発表会	●発表 1人5分
⑭1月20日(火)		【予備日】	

試験： ※この授業は、中間試験・期末試験は実施しません。 提出物だけで成績をつけます(題材1：30点, 題材2：40点, 題材3：30点)

## 澤担当記録 (2014 年度)

教科書:「新版 論文の教室 レポートから卒論まで」 戸田山和久著 NHK ブックス NHK 出版(2012 年)

### 1 回目 要約の書き方 1

要約の書き方の講義。与えられた文章を要約する課題。

### 2 回目 要約の書き方 2

前回課題の復習。筆者の言いたいこと、キーとなるセンテンスは何かを考えさせる。  
対談を書き起こした資料を配布し、各話し手の論点を要約する課題。

### 3 回目 パラグラフライティング 1

パラグラフとは。パラグラフの構造（トピックセンテンス＋サポーティングセンテンス）を講義  
「おせち料理は必要か、不要か」をテーマにした作文をする。

### 4 回目 パラグラフライティング 2

良いパラグラフのチェック方法を講義。  
前回の課題の回答を配布し、良いパラグラフとなっているかの検討会。  
パラグラフの修正に関する課題。(教科書 p. 198)

### 5 回目 パラグラフライティング 3

前回の課題の回答を配布し、良いパラグラフとなっているかの検討会。  
会津大学で貸し出しパソコンを購入すると仮定した場合の機種選定に関する作文。(800 字)

### 6 回目 パラグラフライティング 4

前回の課題の回答を配布し、良いパラグラフとなっているかの検討会。  
総論のパラグラフに関する講義。  
あるコンピュータ研修の受講者数とアンケート結果を配布。改善点を検討、考えを文章にまとめる。(800 字)

### 7 回目 パラグラフライティング 5

前回の課題の回答を配布し、良いパラグラフとなっているか、長すぎるパラグラフはないかの検討会。  
英会話スクールに関する資料を配布。自分が通うならば、どの英会話スクールがベストかを説明する文章を書く。(800 字)  
総論のパラグラフを書く、トピックセンテンスに☆、サポーティングセンテンスにはその役割を書くことを指示。  
この回でパラグラフライティングは終了。

### 8 回目 論理的に考える 1

論理的に考える方法を講義。論証方法の紹介。

論証を行っている文章を提示し、妥当な論証かを答えさせる。

#### 9回目 手紙の書き方

12月の最後の授業。年賀状など手紙を意識する時期になるため、手紙の書き方を講義。

#### 10回目 論理的に考える2

論証の続き。良い論証とダメな論証を講義。論証に対する反論の仕方。

がん告知に賛成する文章を読ませる。主張と使用されている論証の方法を考える。反論できそうなポイントを挙げて、反論の文章を書かせる。

#### 11回目 構想を練る1

文章のトピックと自分の主張が決まっている場合に、構想をまとめる方法を講義。(教科書 pp. 119--125)

#### 12回目 構想を練る2

文章のトピックだけが決まっている場合に、構想をまとめる方法を講義。(教科書 pp. 126--133)

「英語教育の早期導入について」というトピックを与えて、自分の主張をまとめさせる課題。同種の課題を最終課題として使用。

#### 13回目 最終課題

小学校の英語教育の現状に関する資料を配布。「小学校の英語教育強化は必要か」というテーマで作文。(1200字)

## 8. 授業進行の詳細

2013、2014 年度に授業を担当された石橋先生より授業進行の詳細を提供して頂いた。実際にどのように授業が行われていたかを知るうえで大変参考になる資料であるため、次ページより紹介する。

## 石橋史朗先生担当記録（詳細版・2014年度）

文章表現法 第2回 （2014年10月14日）

### 【自己紹介と半年間の目標について】

### 【参考図書】

- (1) 「600字で書く 文章表現法」 平川敬介著 大阪教育図書（2011年）  
説明文と意見文の書き方、資料の活用の仕方、文章表現、実践課題
- (2) 「新版 論文の教室 レポートから卒論まで」 戸田山和久著 NHKブックス NHK出版（2012年）  
論文の構成と執筆準備、アウトラインとパラグラフライティング、論証形式、文章表現、文章の体裁
- (3) 「これからレポート・卒論を書く若者のために」 酒井聡樹著 共立出版（2007年）  
レポートを書く目的、レポートの書き方（テーマから結論・要旨まで）、日本語の文章技術
- (4) 「これから論文を書く若者のために」（大改訂増補版） 酒井聡樹著 共立出版（2006年）  
論文を書く目的、論文の書き方（執筆から掲載まで）、執筆のノウハウ、わかりやすく面白い論文を書く
- (5) 「日本語表現 演習と発展」（改訂版） 大本泉・後藤康二・千葉正昭編 明治書院（2011年）  
日本語の特色、伝わる文章、文章の基本的ルール、小論文・手紙の書き方、プレゼンテーション
- (6) 「理科系の作文技術」 木下是雄著 中公新書（1981年）  
準備作業、文章の組立て、パラグラフ、文の構造と文章の流れ、わかりやすく簡潔な表現
- (7) 「日本語の作文技術」 本多勝一著 朝日新聞社 1982年）  
作文技術とは、修飾の関係、句読点の使い方、漢字とかなの使い方、助詞の使い方、段落、無神経な文章

### 【わかりやすい文章を書くためのキーワード】

- (a) 文章の構成・・・序論・本文・結論、起承転結
- (b) アウトラインとパラグラフライティング・・・アウトライン作成法、アウトラインからパラグラフへ
- (c) 文の構造・・・事実と意見の識別、論理展開
- (d) 文章表現・・・修飾関係、句読点の使い方、漢字とかなの使い方、助詞の使い方
- (e) 執筆と発表の要領・・・論文・レポート、プレゼンテーション

### 【意見文を書く】

テーマ： 英語の早期教育について思うこと

英語の早期教育に関して、「賛成」または「反対」の立場を明確にして意見文を作成してください。  
(800字以内)

【意見文を書く】 \*グループディスカッション

- ・テーマ： 英語の早期教育について思うこと (800字以内)  
英語の早期教育に関して、「賛成」または「反対」の立場を明確にして意見文を作成する。
  
- ・賛成4件：
  - ・言語を使いこなすには脳が柔らかいうちに学習すべき
  - ・幼少期に海外の事を知るのは貴重
  - ・デメリットよりメリットが多い
  - ・英語の重要性に気が付いてからの学習では遅い
  - ・言語は成長の過程で身につけるべき
  - ・将来の仕事をする上で必要不可欠、就職にも有利
  - ・小さい時期から視野を広げられる
  - ・小さい頃の記憶が成長してから役に立つ
  
- ・反対3件：
  - ・幼少期は英語よりも自国の言語や文化の学習が大切
  - ・必要性が理解できる時期に学ぶべき
  - ・日本人の全員が英語を必要としている訳ではない
  - ・小さいうちに母国語をしっかり学ぶべき
  - ・日本語に習熟してから英語を学んだ方が効率的
  - ・早期教育の有無による将来の差は少ない
  - ・子供の嗜好に合わない場合もでてくる
  - ・幼少期は個性や人間性の形成が優先されるべき
  
- ・文型等 ・常体5件、敬体2件 ・第1文で結論型：4件 ・段落数：2、3、4、4、5、5、6
  
- ・コメント：
  - ・テーマは「英語教育の必要性」ではなく「早期教育の是非」
  - ・「主張」に対する「根拠」が弱いと説得力に欠ける
  - ・具体例や自身の体験により説得力が増す
  - ・口語調の表現が混ざらないようにする
  - ・全体の構成や文脈を予め考えて書くようにする
  - ・長文はできるだけ短文にわかる
  - ・疑問文や反対意見への反論の活用
  - ・段落構成には注意する
  - ・文章表現は簡潔なほど読み易い

【意見文の構成】

- ・意見文の基本セットは「主張」と「根拠」  
「主張」＋「根拠」＝「最小単位の意見文」  
⇒「最小単位の意見文」に要約してみることで、意見文としての妥当性を確認することができる。

\*論文などの場合には、「問題提起」「主張」「論証」の形態をとる場合が多い。

- ・意見文の基本構成は「序論」→「本論」→「結論」  
「重点先行主義」：論点をすばやく伝えるために、結論を前へもってくる。  
表題や見出しも一目で内容がわかるように工夫する。

【説明文のポイント】 \*文章構造についての演習

- (1) 説明する対象、説明する相手を理解する
- (2) 文章の構造を明確にする
- (3) 具体化や抽象化を行う
- (4) 比較、対照、比喩などを用いる

【文章の要約】 \*アウトライン作成に向けて

「英語の早期教育について思うこと」(約1500字)を400字以内に要約する。  
また上記文章のアウトラインを箇条書きにまとめる。

【アウトライン】

- ・アウトラインを膨らませたものが文章。アウトラインからできあがった文章は構成のしっかりしたものとなる。
- ・アウトラインは文章の種であると同時に、文章を書くための命令書(次の指示を出すもの)でもある。
- ・アウトラインは成長し変化する。アウトラインは常に暫定的なものである。  
「項目アウトライン」→「文アウトライン」→「文章」

「項目アウトライン」の例： 「チャレンジャー号爆発事故はなぜ起こったか」

「文アウトライン」の例： 「チャレンジャー号爆発事故から何を学ぶべきか」

【アウトライン作成法その1】 RPG法

- ・ある限定された問題が設定されていて、それに対する答えもほぼ決まっている場合に有効

手順1： 自分の武器をチェックする

手順2： 敵の武器をチェックする

手順3： 自分の武器の副作用をチェックする

【RPG法の演習1】

- ・テーマ： 死刑を存続させるべきか廃止すべきか → 死刑廃止に賛成の立場で書く  
死刑廃止論と死刑存続論、それぞれの論拠をあげてみる

- (1) 死刑廃止のための論拠を思いつくかぎり挙げてみる。
- (2) 死刑存続派がどのような論拠に基づいて存続を主張するかを予想してみる。
- (3) 廃止派の論拠に存続派がどのような批判をするかを考える。
- (4) 死刑存続派の議論に対抗するにはどのような反論をすればよいかを考える。

【文章の要約とアウトライン】 前回のフォロー

- ・テーマ：「英語の早期教育について思うこと」を400字以内に要約し、さらにアウトラインを作成する。

<要約のポイント>

- ・全体として、「早期教育の是非」「良い例」「悪い例」「環境次第だが母国語は重要」の4構成を押さえる
- ・上記4構成をそれぞれ1段落として記述する
- ・各段落では、それぞれの主題を明確にし、主題に沿った内容をピックアップしてまとめる
- ・要約であっても、本文を読んでいない人にも理解できるように記述する
- ・本文の言葉を拾うところ、自分の言葉で補うところ、などメリハリをつける

<アウトラインの例>

- ・英語教育早期化の是非 → ケースバイケースで一概には言えない
- ・早期教育が功を奏したケース  
英語が流暢な姉妹の例 日本を拠点とするため英語は第2外国語に 日英ともうまく使い分け
- ・早期教育が弊害を生じたケース  
年長児の男子の例 複数の言語を使うことにより中途半端に アイデンティティの問題も発生
- ・子供の外国語学習にはさまざまな環境が影響 → 早期教育に対して早急な是非は困難  
まずは母国語を大切にすることが重要

【RPG法の演習2】 前回の続き

- ・テーマ： 死刑を存続させるべきか廃止すべきか → 死刑廃止に賛成の立場で書く  
廃止論と存続論の論拠をもとに、廃止論の立場で文章を書く場合の「項目アウトライン」  
ならびに「文アウトライン」を作成する。

【アウトライン作成法その2】 ビリヤード法

- ・トピックだけが与えられて問いを自分で設定しなければならない場合や、問題は設定できたとしても、答えを手探り状態で探す必要がある場合に有効

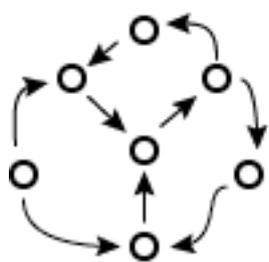
手順1: 「問いのフィールド」を作る

手順2: 「問いのフィールド」から「問いと答えのフィールド」へ

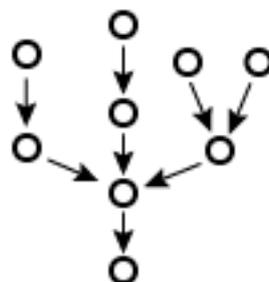
- (1) それぞれの問いに対して、思いつく答えのアイデアや仮説を書き込んでいく。
- (2) 答えを思いつけないときも、何を調べれば答えられるか、アイデアを書き込んでいく。
- (3) 場合によっては、それぞれの問いを細かく分割して、サブ問題を書き込んでいく。
- (4) (1)や(2)の答えに対して、さらに問いをぶつけて生じる新しい問いを書き込んでいく。
- (5) 資料や論文の論点や主張が、フィールド内のどの問題と対応しているかを書き込んでいく。

手順3: 「フィールド」から「アウトライン」へ

- ・問いと答えのフィールドのポイントは、どれだけたくさんの論点を発見できるかということ。文章作成に使うかどうかは忘れて、ひらめきと連想の広がりを追及する。
- ・フィールドからアウトラインにまでもっていくためには、不要なものを捨てる必要がある。もったいないけれども、思いきって捨てることも大切である。



リゾーム上の構造



部分順序



リニアな構造

図: フィールドの構造 (戸田山(2012)を参照して作成)

【ビリヤード法の演習1】

- ・テーマ: 大学生の学力低下問題について  
「そもそも学力とは何か」の問いに対して、「問いと答えのフィールド」を作成する。

<出典・参考> 「新版 論文の教室 レポートから卒論まで」 戸田山和久著

【ビリヤード法の演習1】 前回のフォロー

- ・テーマ： 大学生の学力低下問題について  
「そもそも学力とは何か」の問いに対して、「問いと答えのフィールド」を作成する。
  
- ・問いのフィールドについて (前回抽出された問いの項目)
  - (1) どう定義されているか (2人) →\*
  - (2) どの範囲までを学力と考えるか
  - (3) どのような場面で必要か (2人) →\*
  - (4) 学力さえあれば良いのか (2人) →\*
  - (5) 学力の概念はいつ生まれたのか
  - (6) 学力の概念はどこで生まれたのか
  - (7) 学力の概念は誰が考えたのか
  
- (1) どう定義されているか (2人) →\*
  - ・試験の結果
  - ・学生が自ら学ぼうとする力 (4人)
  - ・テストの結果や偏差値 (3人)
  - ・知識等をインプットしアウトプットする力 (2人)
  - ・学校の授業でやっている中身の理解度
  - ・学問をどれほど追及できているか
  - ・生きていく上で必要とされるもの、現代の日本は学歴社会
  - ・高ければ高いほど良いもの
  - ・日本において初めは誰もが義務的に身につけるもの
  - ・単純に身につけた知識
  - ・授業時間や自主学習
  - ・学んでいる教科の数、学んでいる範囲
  - ・日常生活などで学んだことを生かせるか
  
- (3) どのような場面で必要か (2人) →\*
  - ・学校のテスト (3人)
  - ・日常生活 (簡単な計算・文章の読み書き) (4人)
  - ・入学試験や資格・就職等の試験 (3人)
  - ・文明を発展させるための1つの道具になる
  - ・人に教えるとき (先生から生徒へ、親から子供へ)
  - ・工作中的知識 (モノづくり・製薬)
  - ・出来ないことが出来る、新しい知識を得ることへの喜びを感じる時
  - ・自分が興味を持ったことを学んでいく上での基礎となる時
  - ・人とコミュニケーションをとるとき
  - ・生活の幅を広げるため
  
- (4) 学力さえあれば良いのか (2人) →\*

- ・学校と職場で要求される学力は違う
- ・仮に学力がないとどうなるか
- ・仮に学力の他の能力がないとどうなるか（他の能力とは何か）
- ・学力は大切だろうが、そうではない（3人）  
それだけで生きてはいけるけど、それは良い人生とは言えない  
最低限の学力を身につけることは、生きていく上で必要最低限のこと
- ・人としてあるべき行動をとれるのか  
道徳的・倫理的に背いていては学力があっても論外（人に対するいたわりのなさやいじめ）
- ・良い人も悪い人もいる
- ・学力のある人は人に認められやすい
- ・学力があれば試験で高成績、単位が取れる、いい仕事に就ける、好印象

### 【ビリヤード法の演習2】

- ・テーマ： 「そもそも学力とは何か」  
本日の議論をもとにして、「問いと答えのフィールド」について再考する。  
さらに作成したフィールドをもとにして、「項目アウトライン」と「文アウトライン」を作成する。

- (参考)
- ・大学生の学力低下問題について作った「問いのフィールド」の一例（別紙図）
  - ・学力低下問題の中から抽出したサブテーマに関するアウトラインの例

【「学力とは何か」に関するアウトライン作成】 前回のフォロー

- ・アウトラインでは、「序論（問題提起）」「本論」「結論（問題への答え）」を明確に。フィールドに引きずられない。
- ・「序論」→「本論」、「本論」→「結論」への道筋を明確にする。
- ・「本論」はフィールドを活かして組み立てる。  
(学力の定義? どのような場面で必要? 学力さえあれば良いのか?) その際に流れを整理。

【パラグラフとパラグラフライティング】

- ・パラグラフ：文章を作り上げるための最小構成単位。文章の論理展開の単位となるもの。  
1つのパラグラフでは1つのことを述べる。
  - ・パラグラフライティング：文章についてパラグラフを単位として組み立てる書き方。
  - ・「パラグラフ」＝「トピックセンテンス」＋「サブセンテンス」
    - － トピックセンテンス：パラグラフで述べる1つのことを記述したセンテンス
    - － サブセンテンス：トピックセンテンス以外のセンテンス
      - (1) トピックセンテンスの内容についてのより詳しい説明や具体例
      - (2) トピックセンテンスの内容についての簡単な根拠付け
      - (3) トピックセンテンスを別の言い方で言い換えたもの
      - (4) 前後のパラグラフとのつながりをつける文
- トピックセンテンスはパラグラフの先頭に置くのがパラグラフライティングの基本である。
- (1) トピックセンテンスは前後のパラグラフのトピックセンテンスと論理的に結びついている
  - (2) 各パラグラフのサブセンテンスは、そのパラグラフのトピックセンテンスだけと論理的つながりをもつ
  - (3) サブセンテンスがパラグラフの冒頭にあると、論理の流れを見失ってしまう
- ・パラグラフの分割：パラグラフが長くなった場合には適切な長さで分割していく

【アウトラインからパラグラフ、パラグラフから文章へ】

- ・「アウトライン」→「パラグラフ」→「文章」
  - (1) 簡単なアウトラインを作る (項目アウトライン)
  - (2) 項目アウトラインの「問い」と「主張」をもとに膨らませる ← 調査事項・論証・具体例
  - (3) アウトラインの各項目を短い文の形で表現してみる (文アウトライン)
  - (4) 短い文をトピックセンテンスとして、それを補強・説明してパラグラフを作る (パラグラフアウトライン)
  - (5) 論証や具体例などを盛り込んでパラグラフを充実させていく
  - (6) 長くなりすぎたパラグラフを分割して、パラグラフの相互関係を示す言葉などを付け加える
  - (7) さらに補強すべき点、調査すべき点などを補っていく
  - (8) 文章としてまとめていく

【パラグラフライティングの演習】

- ・テーマ： 英語の早期教育について思うこと  
英語の早期教育に関して、「賛成」または「反対」の立場を明確にして意見文を作成してください。  
(800字以内)
  
- ・意見文作成にあたっては、以下のパラグラフライティングの手法を用いること  
「項目アウトライン」ならびに「最終的な意見文(800字以内)」を提出のこと
  
- ・項目アウトライン作成にあたっての注意事項  
序論・本論・結論の枠組みを明確にする  
パラグラフの構成やトピックセンテンスを意識したアウトラインを作成する  
賛成や反対を根拠付ける具体的なキーワードを明確にする  
持論と反対の立場からでると考えられる根拠も考慮しながら持論を固めていく  
英語早期教育の「是非」に絞り込む (英語の重要性や英語教育そのものへの言及に終始しない)
  
- ・「アウトライン」→「パラグラフ」→「文章」 (再掲)
  - (1) 簡単なアウトラインを作る (項目アウトライン)
  - (2) 項目アウトラインの「問い」と「主張」をもとに膨らませる ← 調査事項・論証・具体例
  - (3) アウトラインの各項目を短い文の形で表現してみる (文アウトライン)
  - (4) 短い文をトピックセンテンスとして、それを補強・説明してパラグラフを作る (パラグラフアウトライン)
  - (5) 論証や具体例などを盛り込んでパラグラフを充実させていく
  - (6) 長くなりすぎたパラグラフを分割して、パラグラフの相互関係を示す言葉などを付け加える
  - (7) さらに補強すべき点、調査すべき点などを補っていく
  - (8) 文章としてまとめていく

【事実と意見の識別】

- ・文章を正確に伝える（あるいは理解する）には、書いている（あるいは読んでいる）文が、客観的な事実を伝えようとしているのか、それとも自分自身の意見を伝えようとしているのか、識別することが重要である。
- ・文の表現における客観性と主観性： 「事実」 ↔ 「意見」 ↔ 「感想」 ↔ 「心情」

【論証のテクニック】

- ・論証とは： ただ単に「Aである」というよりは、「Aである」という主張の説得力を論理的に補強する。そのためになされる言語行為が論証である。
- ・良い論証のための条件（1）  
論証で使われている根拠自体が十分な裏づけを持っていること。
- ・良い論証のための条件（2）  
妥当な論証形式を持っていること。つまり反例のあるような論証形式でないこと。
- ・反論のテクニック（1）  
論証の根拠が十分に裏づけられているかを確認し、裏づけが足りない根拠がある場合にはそこを指摘。
- ・反論のテクニック（2）  
論証形式を確認し、妥当でない論証形式を使っている場合にはそこを指摘。
- ・いろいろな論証形式（別紙参照）

<出典・参考> 「600字で書く 文章表現法」 平川敬介著  
「新版 論文の教室 レポートから卒論まで」 戸田山和久著

【わかりやすい文章とは】

- ・文章の理解とは： 自分（読者）が持っている知識を使って、筋の通った解釈を作り上げること
  - 知らないことは理解できない
  - 筋の通らないことは理解できない
  
- ・わかりやすい文章とは： 読者が情報整理をしやすいこと
  - 読者に情報整理の負担をかけることなく、書き手が意図したとおりに情報整理をしてもらう

【文章全体としてわかりやすくする技術】

- (1) 無駄な情報を削る
- (2) 一度に与える情報は一つに絞る
  - ① 一つの文では一つのことだけを言う
  - ② 一つの段落では一つのことだけを主張する
- (3) どういう情報を伝えるのかを前もって知らせる
  - ① 見出しを付ける
  - ② 全体像を述べてから細部を述べる
  - ③ 段落の書き出しの一文で主題を明示する
  - ④ 次に来る文の位置づけを教える
- (4) 読者が持っている情報を与える
- (5) 重要なことから述べる

【一つ一つの文をわかりやすくする技術】

- ・文がわかりにくい原因
  - ① 一つの文に多くの情報が詰め込まれている
  - ② 情報を与える順番がおかしい
  - ③ どの語がどの語を修飾するのかが不明確である
    - ある語が修飾している語を見つけにくい
    - 一つの語が複数の語を修飾してしまっているように見える
  - ④ 言葉のまとまりを捉えにくい

【一つ一つの文をわかりやすくする技術】 (続き)

- (1) 一つの文では一つのことだけを言う
  - ① 無駄な情報を削る
  - ② 複数の情報を次々とつなげない
  - ③ 情報をついでに付け加えない
  
- (2) 文の主題を先に述べる
  
- (3) 語と語の修飾関係を明確にする
  - ① 語順を替える
    - a 長い修飾語を先に、短い修飾語を後に
    - b 意図せぬ修飾関係を生まないように配置
  - ② テンをうち、修飾語を明示する
    - a 短い修飾語を先にするとき、その後ろにテンをうつ
    - b 長い修飾語の後に長めに文が続くとき、その長い修飾語の後にテンをうつ
    - c 修飾関係を断ち切りたいとき、そこにテンをうつ
  
- (4) 漢字とカナを混ぜて、言葉のまとまりを捉えやすくする

<出典・参考> 「新版 論文の教室 レポートから卒論まで」 戸田山和久著

【プレゼンテーション】

・プレゼンテーションにおける話し方の注意事項

- (1) 論理的に話す
- (2) 結論から述べる
- (3) 主張する根拠を明らかにする
- (4) ことば以外の身体表現にも気をつける
- (5) 大きい声ではっきりゆっくり話す
- (6) 時間に気をつける
- (7) ことばを吟味して選択する
- (8) 短文を重ねる
- (9) 適当な「間」をとる
- (10) 品のいいユーモアを加える
- (11) 5W1Hに注意する

・プレゼンテーションにおける着眼点

- a プレゼンテーションの目的・意図は何か
- b 話の中心（テーマ）は何か
- c 聞き手はどのような人たちか、会場はどんなところか
- d フォーマルか、フランクか、聞く対象に合わせてどのような話し言葉を使うか

【課題】

「文章表現法」の講義で学んだ内容のうち、自分自身の「気づき」として役立った点を3つ挙げよ。  
またそれらを踏まえて、今後の文章作成にあたっての取り組みについて自分の考えを述べよ。

→ レポート1～2枚 プレゼンテーション5分

<出典・参考> 「日本語表現 演習と発展」 (改訂版) 大本泉・後藤康二・千葉正昭編

【課題】

「文章表現法」の講義で学んだ内容のうち、自分自身の「気づき」として役立った点を3つ挙げよ。  
またそれらを踏まえて、今後の文章作成にあたっての取り組みについて自分の考えを述べよ。

→ レポート1～2枚 プレゼンテーション5分

【伝わる文章とは何か】 (まとめ)

- ・「伝わる文章」とは  
客観的な事実や自分の意見を、できるだけ正確に、読者が理解できるように書くこと
- ・文章表現の要点
  - (1) 名文をまねる
  - (2) できるだけ短文で書く
  - (3) 句読点はどこに打つか
  - (4) 段落はどこに設けるか
  - (5) 文末に緊張を (同じ表現を近い箇所で繰り返さない)
  - (6) 5W1Hに注意する
  - (7) 修飾語を多用しない
  - (8) 漢語は和語に直す
  - (9) 外来語の乱用を避ける
  - (10) 「のだ」「のである」を削る
- ・文章を書くプロセス
  - (1) テーマの決定 (項目アウトラインの作成)
  - (2) 材料の収集 (資料収集・調査 ↔ 項目・文章アウトラインの作成)
  - (3) 構想を練る (項目アウトライン → 文章アウトライン → パラグラフライティング)
  - (4) 推敲
- ・推敲の仕方
  - (1) 内容は妥当か、主題や趣旨がはっきり伝わるものになっているか
  - (2) 表現は的確か、文法的な誤りはないか  
(誤字脱字、 接続詞・修飾語・代名詞の使い方、 主述の対応、 修飾・被修飾の関係、 「れる」「られる」の使い方、 口語調、 表記ミス、 意味の重複表現、 敬語表現の誤り)
  - (3) 原稿用紙の使い方は正しいか
  - (4) 孫引きはないか
  - (5) データは正しいか、人名・地名・引用に間違いはないか
  - (6) 題名や副題は適当か

【論文の書き方】

- ・今までの講義のまとめ  
 <出典参考> 「新版 論文の教室 レポートから卒論まで」 戸田山和久著  
 目次、鉄則集、その他ポイントとなる事項
- ・演習： 実際の学術論文を見て、「文章表現」の観点から気づいた点についてまとめる  
 <出典論文> 2008年 情報処理学会論文誌 論文  
 「楽譜情報を援用した多重奏音楽音響信号の音源分離と  
 調波・非調波統合モデルの制約付きパラメータ推定の同時実現」

【伝え方のノウハウ】

- ・「強いコトバ」をつくる5つの技術
  - ① サプライズ法： 適切なサプライズワードを入れて注目を引く
  - ② ギャップ法： 正反対のワードを前半に入れることにより、後半の言いたいことを強調する
  - ③ 赤裸々法： 具体的・ストレートな言葉を入れ込むことにより、言いたいことに現実感を与える
  - ④ リピート法： 反復により相手の記憶に残す、または感情をのせる
  - ⑤ クライマックス法： クライマックスワードから始めることにより、言いたいことに注意を向けさせる
- ・「ノー」を「イエス」に変える3つのステップ
  - ① 自分の頭の中をそのままコトバにしない
  - ② 相手の頭の中を想像する
  - ③ 相手のメリットと一致する願いをつくる
- ・「ノー」を「イエス」に変える7つの切り口
  - ① 相手の好きなこと： 誰でも好きなことは肯定する
  - ② 嫌いなこと回避： 誰でも嫌いなことは避けようとする
  - ③ 選択の自由： 選択の自由を与えられると進んで行動する
  - ④ 認められたい欲： 誰でも人から認められることを願う
  - ⑤ あなた限定： 自分が特別扱いされること、注目されるとうれしい
  - ⑥ チームワーク化： 自分ひとりでないこと、仲間と一緒にであることを望む
  - ⑦ 感謝： 感謝されると誰しもうれしい

<出典参考> 「伝え方が9割」 佐々木圭一著 ダイアモンド社

## 9. 最後に

2015年度より、文章表現法の内容を更新し、「論理的な文章表現」だけでなく、「論理的な思考」、「論理的な読解」も講義内容へ追加した。文章を書くためには文章のロジックを考えることが必要であるし、他の人の文章に関して意見文を書く場合には、まず人の文章を理解することが必要である。このような議論を通して、文章表現法に必要であると判断したが、後藤先生がどう思われるだろうかと少し不安であった。この文章をまとめるにあたり、後藤先生の文章表現法に関する記事を見直したところ、思考力や読解力に関して同様の心配をされていたことが分かった。ご意見を頂くのが不可能となってしまったのは残念だが、変更の大筋のところは後藤先生にも同意してもらえたのではと思う。

特に文セ(2008)の報告で、学生の思考力や読解力に関するお考えと懸念を述べられている。思考力に関しては、文章力と思考力は一体のものであるという考えを持たれていたようである。文章を書くということは、考えを言葉で表現することである。しかし、最初の考えは大体内容が粗く、文章を書くうちに、考えも徐々に整理されて洗練されていく。洗練された考えで文章を書き直す、というように文章と思考を往復しながらそれらを深めていくのが表現のプロセスであるとのことである。後藤先生のオフィスには何度もお邪魔したが、こういった真面目な話はあまりしなかった。思考力と文章力を同時に鍛えるにはどうすれば良いかなど議論してみたかったと思う。

会津大生が卒業するためには、「研究を実行」し、その研究を「英語」で、「分かりやすく伝える」論文を書く必要がある。「研究の実行」に関しては3年時より配属される研究室の指導教官より、「英語」に関しては語学研究センターで提供している豊富な語学の授業により指導を受けることができる。しかし、最後の「分かりやすく伝える」という点に関して指導を受けられるのは、文章表現法(1単位)以外にはあまり思いつかない。残念ながら文章表現法の授業時間だけでは論理的な文章を書くに至るには十分ではないと思う。しかし、履修した学生にとっては文章表現を意識するきっかけとなる授業であると思う。今後も学生が「分かりやすく伝える」論文を書くのにこの授業が役に立ってくれることを願う。

## 参考文献

- 会津大学文化研究センター（文セ） 2008 会津大学文化研究センター公開セミナー・会津大学公開講座  
「文章が書けない若者たち」 会津大学文化研究センター年報 第14号 3-31
- 青木 滋之 2013 初年次ゼミの開講 ——会津大学の取組み 第63回東北・北海道地区大学等高等・  
共通教育研究会 研究集録 31-34
- 後藤 康二 2007 「文章表現法」実践報告Ⅰ —2006年度基礎力調査の結果— 会津大学文化研究セン  
ター年報 第13号 159-169
- 後藤 康二 2014 文化研究センターの20年・覚書 会津大学文化研究センター年報 第20号 173-  
180
- ジョンソン, D.W., R. T. ジョンソン, K. A. スミス (原著)、関田一彦 (監訳) 2001 学生参加型の大学  
授業 ——共同学習への実践ガイド 玉川大学出版部